投稿論文

大学生の「居場所環境」と自我同一性との関連
── 現在と過去の「居場所環境」に対する認知との比較を中心として ──

杉　本　希　映※
庄　司　一　子※※

The Relationships between "Environment of Ibasho" and Identity in University Students
— A Comparison with the Past "Environment of Ibasho" —

Kie SUGIMOTO
Ichiko SHOJI

本稿では，個人の複数の「居場所」を包括的に捉える「居場所環境」という視点を導入し，自我同一性との関連を明らかにすることを目的とした。大学生を調査対象とし，現在の「居場所環境」と同時に，回想法により過去（中学生の頃）の「居場所環境」のデータも収集し，その比較を中心に，自我同一性との関連を検討した。その結果，自我同一性との関連では，中学生の頃も現在の「居場所環境」も，「居場所」がない人の自我同一性の混乱が示された。また，自我同一性の形成には，中学生の頃には「家族のいる居場所」，大学生では「友だちのいる居場所」「自分ひとりの居場所」を持つことが重要であることが明らかとなった。また，中学生の頃の方が「居場所」がない人が多いこと，現在の「居場所環境」よりも中学生の頃の「居場所環境」の認知の方が，自我同一性の形成に影響を与えていることが明らかとなったことから，中学生の「居場所環境」の重要性を指摘できたと考える。

問題の所在と目的

昨今の「居場所」への注目は，1980年代不登校問題から発したといわれている（安齋，2003；住田，2003a）。学校に居場所がない子どもたちのための「居場所」づくりの動きから，「居場所」というものへの関心が高まってきており，子どもの

※筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程
※※筑波大学大学院人間総合科学研究科

「居場所」問題は，「居場所」がないことへの注目から，「居場所」を作るという動きに進展しつつあるといえる。一方，学校教育上の問題からの「居場所」への注目とともに，臨床心理学の分野においても，「ひきこもり」などのクライアントから聞かれる「居場所がない」という感覚に注目がされている。北山（1993）は，「居場所」を「自分が自分でいるための環境」と捉え，そのような「居場所」を失ってはじめて「自分がない」つまり「居場所」がないことに気づくとし，いくつかの症例をこの視点から分析している。このことからも，現在の「居場所」への注目は，現代社会における「居場所」がないということの危機感の表れとも捉えることができ，緊急の課題であるといえるのである。

このような中で，「居場所」を実証的に分析していく動きが，1990年代後半から見られるようになるが，課題も多い。まず，「居場所」という言葉の定義についてであるが，いまだ確立しているとはいえない。「居場所」の本来の意味は，「その人のいる場所」（三省堂現代国語辞典，1998）となっており，人がいる場所という物理的な意味である。しかし，先行研究や関連書籍の中では，文部省の「児童生徒が存在感を実感することができ，精神的に安心していることのできる場所」（1992）という定義にもあるように，「安心して身を置くことのできる場所」（上野，1992），「自己存在感が得られる場所」（坂本，1993）という心理的な意味が含まれているものが多い。つまり，現代においての「居場所」という言葉には，単に人がいる所という物理的な意味だけではなく，心理的な意味が含まれているといえる。しかし，この心理的な意味を含めた「居場所」の定義は，使用者によって異なっており，また，これまで使用されている定義も実証的なデータに基づいた定義ではないという問題点を有している。

そのような中で，「居場所」の実証的研究はどのように行われているのだろうか。これまでの「居場所」の研究方法には，２つのアプローチがあると考えられる。１つ目は，人が実際にいる場所を調査し分析する方法である。たとえば，学校を調査対象とした研究（深谷・永井・山田，2001）などがあり，心理的な意味を含めない辞書通りの「居場所」研究としては，意義のあるものである。しかし，確かに物理的に居る場所ではあるが，「居場所」とは感じていないという場所，たとえば，本人は行きたくないが仕方なく行っている学校なども含まれてしまうため，本人の主観が無視されることとなる。現代の心理的な意味を含んだ「居場所」を捉えていくには問題があるアプローチといえる。

2つ目のアプローチは，「ここは自分の居場所である」と自己認知した場所を調査対象とし，分析する方法である。これらは，対象者から居場所と感じる場所をあげてもらい，それらのデータを分析する手法をとっており，「居場所」の心理的な意味を探っていく手法として適しているといえる。しかしこのアプローチには，上述したように「居場所」の概念が統一定義を得ていないために，対象者個人の捉え方により「居場所」がかなり違ったものになるという問題が生じる。「自分の好きなマンガの中」といった空想の世界の中を「居場所」という子もいれば，「友だち」のように場所ではなく人を「居場所」と捉える子もいるだろう。よって，研究によって捉えたい「居場所」を操作的に定義していく必要がある。

これまでの「居場所」に関する実証的研究は，「居場所」の形成要因を探り「居場所感」尺度の作成を行う研究（小畑・伊藤，2003；大久保・青柳，2000；堤，2002），「居場所」を分類してその特徴を明らかにする研究（松田，1997），発達的な変化を分析する研究（住田，2003b；富永・北山，2003）があり，「居場所」の構成概念を探ることが中心であった。現在では，それら「居場所」と個人の精神的諸側面との関連に関心が集まりつつある。問題提起が不登校問題であったということもあり，学校適応との関連を分析した研究が多く，その関連が示されている（檜皮・浅川・古川，2002；稲葉・西・古川・浅川，2001；田中・田嶌，2004；豊田・宮崎・大寺・小澤・芳賀，2000）。しかし，「居場所」の精神的な側面への影響は，単にその時期の適応の問題だけなのだろうか。「居場所」の研究は，長期的な影響をも明らかにすることが必要だと考えられるが，この点を明らかにした研究は見当たらない。文部科学省（旧文部省）の提言（1992）を始め，現在，学校教育現場で盛んに行われ始めている「居場所づくり」ではあるが，「居場所」とは何か，「居場所」の持つ機能は何か，「居場所」の与える影響は何か，という実証的な研究が後回しにされている感が否めない。ただの流行に終わらせないためにも，学校教育上の諸問題に対する「居場所」という視点からのアプローチの意義と有効性を示していかなければならないと考える。

そこで本研究では，中学生からはじまる青年期に焦点を当て，青年期の重要な精神的発達課題である自我同一性と「居場所」との関連を，過去の中学生の頃の「居場所」と大学生の現在の「居場所」との比較を通して明らかにすることとした。本研究における，「居場所」の操作的定義は，はじめから「落ち着く場所」のように限定的に捉えることは避ける。しかし，「居場所」であると自己認識してい

る場所であることと，日常生活の具体的な場所であること，という本研究で捉えたい「居場所」を分析対象とするために，そこでの精神状態を限定しないことを考慮し，「いつも生活している中で，特にいたいと感じ，いられる場所」とし，調査時に質問紙に付記することとした。「いたい場所」とは，「自分が居場所と感じている場所」という主観性を示したもので，単に人がいる場所としての居場所と区別するために設定した。

自我同一性は，Erikson の発達理論の中核であり，青年期の精神的側面として代表的な概念であると考えられる。Erikson は，青年期の心理社会的危機として，「自我同一性の拡散・混乱」を挙げ，一生の間の８つの発達段階の中でも，特にこの時期の危機を強調しており，個人の精神的な発達においては，非常に重要な概念であるといえる。先にも述べたように北山（1993）は，「居場所がない」ことを「自分がない」ことと捉え，「『自分がない』というのは一貫した自分がいないという意味であり，このような『自分がない』ではアイデンティティ論におけるアイデンティティの拡散…の理解に有効」（p. 175）であるとしている。また，最近の自我同一性の研究では，自我同一性の形成における他者の役割が重視される動向が指摘されており（永田・岡本，2005；杉村，1998），対人関係が想定される「居場所」の役割も重要であることが推測される。堤（2002）も，自我同一性の混乱と「居場所がない感覚」との関連を検討し，居場所がない感覚の中核に自我同一性の混乱があることを明らかにしている。したがって，「居場所」がないことによる問題は，青年期においては，自我同一性の問題と密接に関係していることが推測される。

自我同一性については，様々な尺度が開発されているが，全般的な同一性の感覚を測定する尺度と Erikson の心理社会的発達段階のそれぞれの感覚を測定する尺度の2つに大別できるとされている（谷，2001）。堤（2002）は，前者に属する砂田（1979）の自我同一性混乱尺度を使用しており，全般的な同一性混乱の感覚との関連を検討している。よって，「居場所」との関連をより詳細に検討するためには，自我同一性の多側面との関連，つまり後者の尺度を使用する必要があろう。後者の尺度の代表的なものとして，Rasmussen（1964）の邦訳版である宮下（1987）の自我同一性尺度と谷（2001）の多次元自我同一性尺度が挙げられるが，谷（2001）の尺度は，自我同一性を多次元で捉えている点，また高い信頼性と妥当性が確認されている点で，「居場所」との関連を検討する尺度として有用であると

いえる。

ところで，杉本・庄司（2003）は，現代の小・中・高校生の「居場所」の心理的機能には，「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6つの因子があることを明らかにし，そのうえで，「居場所」を対人関係により「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「家族以外の人のいる居場所」の3つに分類して分析を行っている。「家族のいる居場所」は，どの機能も安定して果たしているが，発達に伴い選ばれることが少なくなっていくという特徴があり，「自分ひとりの居場所」は「他者からの自由」の機能が高い静的な「居場所」，逆に「家族以外の人のいる居場所」（主に「友だちのいる居場所」）は，「被受容感」「自己肯定感」の機能が高い動的な「居場所」となっており，それぞれの「居場所」の持つ心理的機能の固有性を明らかにしている。この結果から，特に中学生以降の子どもたちは，1つの「居場所」ですべての機能を充足することは困難であり，発達に応じて，固有の機能を持った様々な「居場所」を複数持つことで「居場所」の機能を充足しているのではないかという考察を得ている。以上の点から，今後の「居場所」研究は，個人が持っている複数の「居場所」を包括的に捉えて分析するという，新たな視点が必要である。小沢（2000）も，居場所を概念化する中で，ひとりの人間が持つ居場所は「多くの人々は5個以内」であり，「居場所の総体としてのゲシュタルト」として，個人が所有する複数の居場所を全体的に捉える視点を提供している。そこで本研究では，個人を取り巻く「居場所」を包括的に捉えるために，「居場所環境」という視点を導入した。「居場所環境」とは，どのような固有性を持った「居場所」をどのようなバランスでいくつ所有しているのかを表す用語として使用することとした（Figure 1）。具体的には，「自分ひとりの居場所」と「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」と「家族・友だち以外の人がいる居場所」を，1種類のみ持っているか，複数持っているとしたらどのような組み合わせで持っているのか，あるいはすべて持っているのかという観点から，「居場所環境」を分類し，その分類により差異を明らかにしていくこととする。

以上より，本研究では，大学生を対象に，「居場所環境」の変遷の様相を把握し，そのうえでそれぞれの「居場所環境」が自我同一性とどのように関連しているかを明らかにすることを目的とする。具体的には，現在の「居場所環境」とともに，中学生の頃の「居場所環境」を回想法で捉え，「居場所環境」を分類し，そ

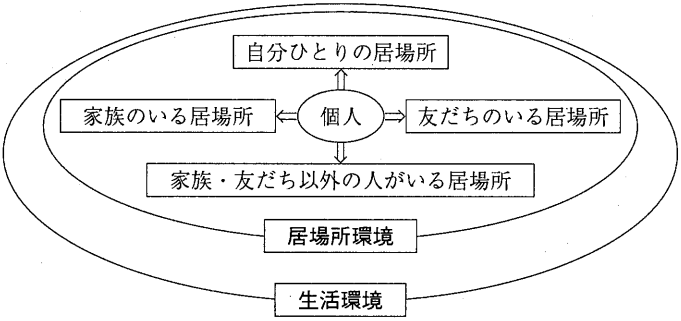

Figure 1　個人を取り巻く「居場所環境」

れらと谷（2001）の多次元自我同一性尺度との関連を検討することとする。

方　法

調査対象者

首都圏内の私立大学２校，独立行政法人大学1校の学生計330名（男子177名・女子153名）を調査対象とした。平均年齢は19.66歳（*SD* ＝1.10），年齢の範囲は18歳から23歳であった。

調査時期・手続き

2005年７月上旬に，各大学の講義時間中，集団形式で実施し，回答は無記名で行われた。

質問紙

フェイスシートで，性別・年齢について尋ねた後，以下項目について回答を求めた。

(1) 多次元自我同一性尺度（谷，2001）：20項目を Appendix に示した。「７：非常にあてはまる，６：かなりあてはまる，５：どちらかというとあてはまる，４：どちらともいえない，３：どちらかというとあてはまらない，２：ほとんどあてはまらない，１：全くあてはまらない」の７件法とし，それぞれの項目に対して現在の自分がどのくらいあてはまるか，あてはまる数字を選択するように求めた。

(2)「居場所環境」に関する質問：「居場所」について「居場所とは，いつも生活している中で，特にいたいと感じ，いられる場所とお考えください」という説

明を付記した上で，中学生の頃と現在の「居場所」の有無を２択で回答を求めた。この質問に対して「ある」と回答したもののみ，中学生と現在のそれぞれの「居場所」の具体的な場所を５つまであるだけ自由記述してもらい，その各「居場所」に対して，「１：自分ひとり，２：家族がいる，３：友だちがいる，４：家族・友だち以外の人がいる（誰かを具体的に記入）」のどれにあてはまるか，あてはまる数字１つの選択を求めた。

結果と考察

１　現在と過去の「居場所環境」の比較分析

(1)「居場所」の有無の比較

現在の「居場所」の有無の比は，304名（95.0%）：16名（5.0%），中学生の頃の回想の「居場所」の有無の比は，302名（93.5%）：21名（6.5%）という結果であった。現在と中学生の頃の回想の「居場所」の有無で差があるか否かを検討するために，x^2検定を行ったところ，中学生の頃の方が現在よりも「居場所」がないと認知している人が有意に多いことが明らかとなった（$x^2[1]=85.65$, $p<.001$）。また，中学生の頃と現在で，「居場所」の有無が変わっている人は，「中学生の頃なし－現在あり」が11名（3.3%），「中学生の頃あり－現在なし」が６名（1.8%），変わっていない人は，「中学生の頃なし－現在なし」が10名（3.0%），「中学生の頃あり－現在あり」が292名（88.5%）となっている。よって，最も多かったのが，中学の頃も現在も「居場所」ありと回答した人であり，最も少ないのが，中学生の頃は「居場所」があったと認知しているが，現在は「居場所」がないと感じている人であるという結果が明らかとなった。

杉本・庄司（2005）の中学生を対象とした「居場所環境」の調査では，「居場所」なしが，約３割いたことと比較し，本調査では，中学生の頃「居場所」なしと回答した割合は，6.5%であり，少なくなっている。よって，過去を回想した時の方が「居場所」があったと感じる傾向があり，その当時は「居場所」と認知できなかった場所も，成長してから思い返すと「居場所」であったと認知できるようになるという可能性が考えられる。しかし，本調査では，大学にまで進学した人のみと対象者が絞られた事によって，その差が生じた可能性も同様に否定できない。よってこの点に関しては，今後，縦断的な調査で明らかにしていく必要があるだろう。

(2)「居場所」数の比較

質問紙において，「居場所」の自由記述で記入した数を，「居場所」数とした。なお，「居場所」なしと回答したものについては，「居場所」数は「0」とした。中学生の頃の「居場所」数は，平均2.92個（$SD = 1.34$），現在の「居場所」数は，平均2.85個（$SD = 1.32$）であった。中学生の頃の回想と現在の「居場所」数を比較するために，平均値の対応のある t 検定を行ったが，有意差は認められなかった（$t = .91$，$df = 315$，*n.s.*）。よって，中学生の頃の「居場所」数の認知と現在の「居場所」数は，差がないことが明らかとなった。

この結果から，「居場所」を複数持つことが明らかとなり，「居場所環境」として捉えることの意義が確認されたといえる。

(3) 具体的な場所（自由記述）の比較

質問紙における現在の「居場所環境」の自由記述の回答のうち，度数の多かった上位5つの場所を集計した結果を Table 1 に示す。現在の「居場所環境」の1つ目の自由記述では，上位3つが「自分の部屋」「家」「アパート・下宿」「宿舎」となっており，自由記述のため，「家」が一人暮らしの下宿を指すのか，実家を指すのかは不明ではあるが，住環境が多いという結果となった。これは，「自分ひとりの居場所」と「家族のいる居場所」である可能性が高いといえる。2つ目以降は，「学校・大学」「サークル」「バイト先」「友だちの家・部屋」など，住環境の他に人と関わる場所が挙げられており，これは「友だちのいる居場所」あるいは「家族・友だち以外がいる居場所」である可能性が高いといえる。一方，中学生の頃の回想では，1つ目，2つ目，3つ目までは，順位は異なるが，「自分の部屋」「家・リビング」「学校・教室」「部活・部室」と言う4ヶ所で占められており，「居場所」として思い起こされる場所の傾向を表わしているといえる。中学生の頃の回想と現在の「居場所」の具体的な場所は，どちらも日常の生活空間と密接に関係していることが同様の特徴といえ，中学生と大学生では，その生活空間が異なってくるため，「居場所」として挙げられる場所もそれに伴って，変わってきていると考えられる。しかし，場所は異なってくるが，「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」がそれぞれに挙げられており，分類の妥当性が得られたといえるのではないだろうか。

(4)「居場所」の分類による比較

調査において，「居場所」の分類を「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」

Table 1　中学生の頃と現在の「居場所環境」の上位５つの場所（n / %）

		1	2	3	4	5	無記入
中学生の頃の「居場所」	1つ目	自分の部屋 (136/41.2)	家 (41/12.4)	リビング (41/12.4)	学校 (24/7.3)	教室 (24/7.3)	(27/8.2)
	2つ目	教室 (70/21.2)	家 (43/13.0)	リビング (43/13.0)	自分の部屋 (36/10.9)	部活・部室 (24/7.3)	(51/15.5)
	3つ目	リビング (35/10.6)	教室 (35/10.6)	部活・部室 (34/10.3)	家 (23/7.0)	学校 (18/5.5)	(114/34.5)
	4つ目	部活・部室 (29/8.8)	リビング (14/4.2)	祖父母の家・部屋 (11/3.3)	塾 (10/3.0)	自分の部屋 (9/2.7)	(206/62.4)
	5つ目	台所 (9/2.7)	塾 (4/1.2)	教室 (3/0.9)	リビング (2/0.9)	お風呂 (2/0.9)	(228/87.3)
		1	2	3	4	5	無記入
現在の「居場所」	1つ目	自分の部屋 (145/43.9)	家 (48/14.5)	アパート・下宿 (28/8.5)	学校・大学 (21/6.4)	宿舎 (15/4.5)	(23/7.0)
	2つ目	学校・大学 (60/18.2)	友だちの家・部屋 (31/9.4)	自分の部屋 (26/7.9)	家 (21/6.4)	リビング (20/6.1)	(57/17.3)
	3つ目	学校・大学 (39/12.8)	バイト先 (27/8.2)	サークル (20/6.1)	実家 (15/4.5)	リビング (15/4.5)	(119/36.1)
	4つ目	バイト先 (13/3.9)	サークル (11/3.3)	実家 (9/2.7)	家 (6/1.8)	リビング (6/1.8)	(221/67.0)
	5つ目	バイト先 (8/2.4)	友だちの家・部屋 (5/1.5)	自分の部屋 (2/0.6)	家 (2/0.6)	サークル (2/0.6)	(284/86.0)

「友だちのいる居場所」「家族・友だち以外の人のいる居場所」の４種類とした。「家族・友だち以外の人のいる居場所」は，そこにいる人を具体的に記述してもらっているが，その結果を集計したところ，「祖父母」「バイト先の人」「知らない人」「ペット」など，かなり多岐にわたっており，これらを１つの同質の「居場所」として扱うことは問題があると考えられる。よって，本研究においては，「家族・友だち以外の人のいる居場所」を分析から除外することとした。この「居場所」に関しては，調査法を検討し，改めて分析を行う必要が残された。

１つ目から５つ目まで記入してもらったすべての「居場所」を，それぞれの「居場所」に対して，「自分ひとり」「家族がいる」「友だちがいる」のどれかに選択してもらった結果を合計した結果を Figure 2 に示す。中学生おいて，３つの分類で差があるかを検討するために，x^2検定を行ったところ，有意差が認められた（$x^2[2]=80.08$，$p<.001$）。調整済み残差による残差分析の結果，「友だちのいる

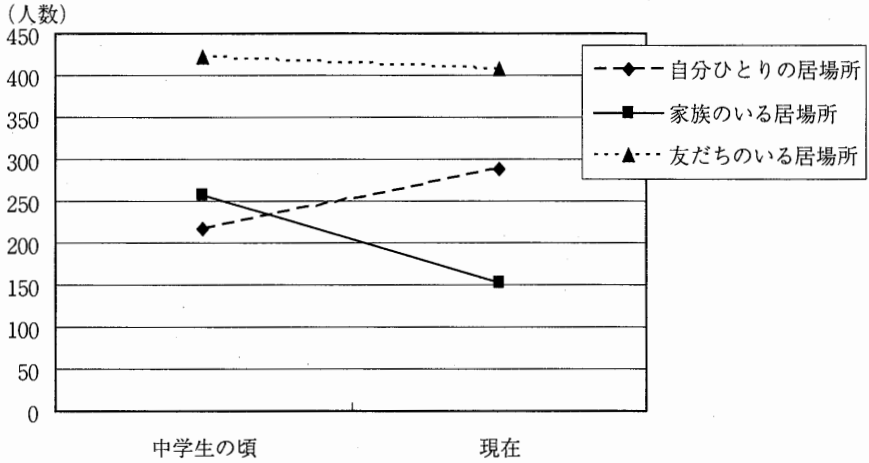

Figure 2　現在と過去の「居場所」数の比較

居場所」が有意に多く，「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」が有意に少なかった。大学生においても「居場所」間で有意差が認められ（$x^2[2]=116.08$, $p<.001$），残差分析の結果，「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」が有意に多く，「家族のいる居場所」が有意に少なかった。

この結果から，大学生になると「家族のいる居場所」が減り，「自分ひとりの居場所」を持つことが多くなるという発達的な差が示された。「居場所」数では，発達的な差がなかったことから，「居場所環境」は「居場所」が増えていくのではなく，種類が変わっていくという発達的変遷をたどると考えられる。

(5)「居場所環境」の分類（8群）による比較

質問紙において，各「居場所」に対して，「自分ひとり」「家族がいる」「友だちがいる」のいずれかを選択してもらった回答をもとに，「居場所環境」を以下の8群に分類した。

「A群＝居場所なし」「B群＝自分ひとりの居場所1種類のみ」「C群＝家族のいる居場所1種類のみ」「D群＝友だちのいる居場所1種類のみ」「E群＝自分ひとりの居場所と家族のいる居場所の2種類」「F群＝自分ひとりの居場所と友だちのいる居場所の2種類」「G群＝家族のいる居場所と友だちのいる居場所の2種類」「H群＝自分ひとりの居場所と家族のいる居場所と友だちのいる居場所の3種類すべて」である。

中学生の頃の回想の「居場所環境」と現在の「居場所環境」の8群別人数をFigure 3に示す。中学生の頃の回想の「居場所環境」の群間の度数に差があるか否かを検討するために，x^2検定を行ったところ，有意差が認められた（$x^2[8]=2873.68$，$p<.001$）。調整済み残差による残差分析の結果，G群とH群が有意に多く，他の群が有意に少ないという結果が示された。現在の「居場所環境」の群間の度数に差があるか否かを検討するために，x^2検定を行ったところ，有意差が認められた（$x^2[8]=285.20$，$p<.001$）。残差分析の結果，F群とH群が有意に多く，他の群が有意に少ないという結果が示された。どちらも，H群（3種類すべて）が多いというのは同じであるが，中学生の頃ではG群（家族＋友だち）が多く，現在ではF群（自分ひとり＋友だち）が多いという違いが示された。これは，ひとり暮らしが多くなるという物理的な要因とともに，親からの精神的自立とも関係していることが推測される。

2 「居場所環境」と自我同一性との関連

自我同一性は，従来の研究では性差が指摘されている（杉村，1998）が，本調査においては，性別と「居場所環境」（8群）による2要因分散分析を行った結果，すべてにおいて性別の主効果，交互作用が認められなかった。よって，以下の分析は，「居場所環境」の1要因による分散分析の結果を検討することとした。なお，「居場所環境」のうち，度数が1桁の少なかった群は，分析から除外した。

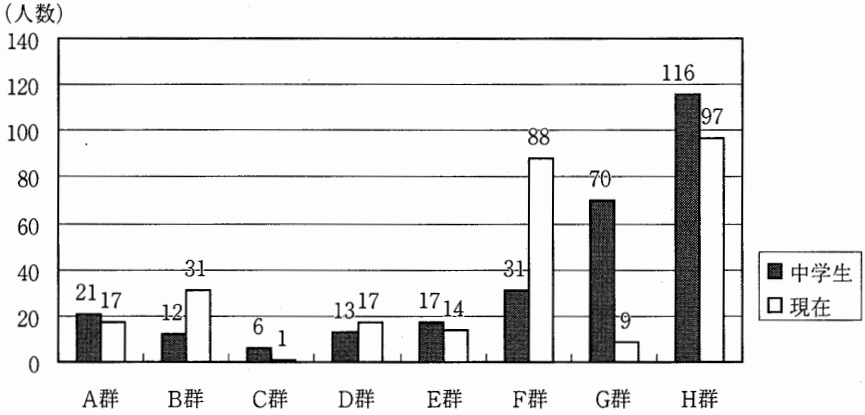

Figure 3　現在と過去の「居場所環境」の比較（グラフ内は人数）

(1) 現在の「居場所環境」と自我同一性との関連

現在の「居場所環境」のと自我同一性との関連を検討するために，分散分析を行った。なお，「居場所環境」８分類のうち，度数の少なかったC群（$n=1$）とG群（$n=9$）を除外し，他の６群（A群［居場所なし］・B群［自分ひとりの居場所のみ］・D群［友だちのいる居場所のみ］・E群［自分ひとり＋家族の２種類］・F群［自分ひとり＋友だちの２種類］・H群［３種類すべて］）を分析の対象とした。その結果を Table 2 に示す。「自己斉一性・連続性」，「対自的同一性」，「対他的同一性」，「心理社会的同一性」，「合計」のすべてにおいて有意差が認められた。多重比較（Tukey-HSD 法，5%水準）の結果，「自己斉一性・連続性」では，A群がD群・H群より有意に低かった。「対自的同一性」ではE群がH群より低かった。「対他的同一性」ではA群がD群・F群・H群より低かった。「心理社会的同一性」ではA群・B群・E群がH群より，A群がF群より有意に低かった。「合計」ではA群・B群がH群より低かった。「居場所」なし群が，「対自的同一性」以外で有意に低く，混乱していることが示され，逆に３種類すべて持っている群が，すべてにおいて有意に高く安定した自我同一性を持っていることが示された。

大学生では，「自分ひとりの居場所」を持つことが多くなる傾向が，「居場所」の分類による比較で明らかとなったが，この「自分ひとりの居場所」は，自我同一性の「他者からの分離・自律」によって形成される側面（杉村，1998）を促す場として重要な機能を果たしていることを表していると考えられる。しかし，結

Table 2　自我同一性における現在の「居場所環境」８分類の上位６群別の平均値（*SD*）と分散分析の結果

	自己斉一性・連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	合計
A	3.61 (1.43)	4.14 (1.65)	2.88 (1.20)	3.49 (1.14)	3.58 (1.04)
B	4.13 (1.15)	3.88 (1.23)	3.59 (1.00)	3.81 (1.01)	3.87 (.90)
D	5.07 (1.34)	4.69 (1.21)	4.01 (1.05)	4.15 (1.22)	4.49 (.90)
E	4.21 (1.16)	3.48 (1.30)	3.70 (1.12)	3.54 (1.31)	3.75 (1.10)
F	4.55 (1.44)	4.11 (1.43)	3.79 (1.04)	4.39 (1.00)	4.21 (.96)
H	4.81 (1.28)	4.58 (1.22)	4.06 (1.05)	4.63 (1.05)	4.53 (.87)
*F*値	3.46 **	3.01 *	4.03 **	6.45 ***	5.08 ***
	A<D, H	E<H	A<D, F ,H	A, B, E<H　A<F	A, B<H

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

果を見てみると「合計」においては，「居場所」のないA群が低いのみならず，他者と関わる「居場所」のないB群（自分ひとりのみ）も低くなっている。杉村(1998）は，自我同一性の形成には，「他者からの分離・自律」とともに，「他者との結びつき」も必要であり，その両側面の相互作用と結合が必要であると指摘している。「自分ひとりの居場所」は発達にしたがって持つ傾向が高くなるが，それのみでは，健全な自我同一性の形成にはつながらないことが推測される。また「心理社会的同一性」においては，E群（自分ひとり＋家族）は低いが，同じ2種類のF群（自分ひとり＋友だち）は高いという結果となっており，「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」においても，D群（友だちのみ）が高くなっていることからも，「友だちのいる居場所」の重要性がうかがえる。したがって，自我同一性と大学生の「居場所環境」との関連では，3種類とも持っている最もバランスの取れた「居場所環境」が良好な自我同一性と関連を持っており，逆に「居場所」がないことや，特に「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」1種類のみで「友だちのいる居場所」のないバランスの取れていない「居場所環境」が混乱した自我同一性と関連していることが明らかとなった。

(2) 中学生の頃の「居場所環境」の認知と自我同一性との関連

中学生の頃の「居場所環境」の認知と自我同一性との関連を検討するために，分散分析を行った。なお，「居場所環境」8分類のうち，6人しかなかったC群（家族のいる居場所のみ）を除外し，他7群（A群［居場所なし］・B群［自分ひとりの居場所のみ］・D群［友だちのいる居場所のみ］・E群［自分ひとり＋家族の2種類］・F群［自分ひとり＋友だちの2種類］・G群［家族＋友だちの2種類］・H群［3種類すべて］）を分析の対象とした。その結果を Table 3 に示す。「自己斉一性・連続性」，「対他的同一性」，「心理社会的同一性」，「合計」で有意差が認められた。多重比較（Tukey-HSD 法，5%水準）の結果，「自己斉一性・連続性」では，A群がH群より有意に低かった。「対他的同一性」と「合計」では，A群がE群・G群・H群より有意に低かった。「心理社会的同一性」では，A群がF群・G群・H群より有意に低かった。

「居場所」のないA群が，3つの下位尺度と「合計」おいて有意に低いという結果となり，中学生の頃に「居場所」がなかったと認知している人の自我同一性が混乱していることが示された。「自己斉一性・連続性」ではE群・H群，「対他的同一性」「心理社会的同一性」「合計」ではE群・G群・H群が高いという結果で

Table 3　自我同一性における中学生の頃の「居場所環境」8分類の上位7群別の平均値（*SD*）と分散分析の結果

	自己斉一性・連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	合計
A	3.85 (1.48)	3.81 (1.60)	2.90 (1.13)	3.36 (1.19)	3.49 (.86)
B	3.76 (1.27)	3.78 (1.63)	3.38 (1.22)	3.95 (.98)	3.77 (1.01)
D	3.95 (1.62)	4.35 (.77)	3.60 (1.00)	3.70 (.92)	3.88 (.80)
E	5.07 (.91)	4.24 (1.47)	4.09 (1.14)	4.39 (1.03)	4.45 (.69)
F	4.41 (1.43)	4.35 (1.49)	3.73 (1.03)	4.31 (1.19)	4.17 (1.09)
G	4.70 (1.36)	4.28 (1.38)	3.73 (1.07)	4.41 (1.03)	4.26 (1.00)
H	4.82 (1.33)	4.42 (1.29)	4.11 (1.00)	4.58 (1.08)	4.51 (.94)
*F*値	3.19 **	.88 *n.s.*	4.88 ***	4.81 ***	4.23 ***
	A<D, H	E<H	A<D, F, H	A, B, E<H　A<F	A, B<H

*p<.05, ** p<.01, *** p<.001

あり，この群すべてに「家族のいる居場所」が含まれている。よって，中学生の頃の「居場所環境」に「家族のいる居場所」があったと認知していることが，自我同一性全体の獲得には重要であることが示唆された。中学生は，青年期前期，思春期ともいわれ，親からの心理的離乳の入り口である。大学生に比べて中学生は親からの精神的自立が確立していないため，この時期は「他者との結びつき」（杉村，1998）のうち，家族との結びつきが，自我同一性の安定には重要であるといえる。この結果は，大学生の場合では他者が家族であると自我同一性が低かったこととの間に違いがあり，興味深い。中学生の頃には，「居場所」を持っていることがまず重要であるが，更に「家族のいる居場所」が含まれている「居場所環境」の方がよりよい自我同一性の形成に関連していることが示唆された。

(3)「居場所」の有無が自我同一性に与える影響の比較

以上の結果より，自我同一性が最も混乱しているのは，「居場所環境」の分類の中のA群（「居場所」なし）であることが明らかとなった。そこで，中学生の頃の「居場所」の有無の認知と現在の「居場所」の有無が，自我同一性に与える影響を検討するために，「居場所」の有無を独立変数，自我同一性尺度の各下位尺度とその合計を従属変数として重回帰分析を行った（Table 4）。その結果，中学生の頃の「居場所」の有無の認知は，「対他的同一性」「心理社会的同一性」「合計」の3つに影響力を持ち，現在の「居場所」は「自己斉一性・連続性」のみに影響力を持つことが明らかとなった。現在の「居場所」の有無よりも，中学生の頃の「居

Table 4 「居場所」の有無を独立変数、自我同一性尺度を従属変数とする重回帰分析の結果

	自己斉一性・連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	合計
中学生の頃の「居場所」の有無	.06	.11	.16 *	.19 **	.16 *
現在の「居場所」の有無	.16 *	-.01	.12	.09	.10
説明率（R^2）	.04 **	.01*n.s.*	.06 ***	.06 ***	.05 ***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

場所」の有無の認知の方が，自我同一性に対してより影響を与えていることが示された。

本調査においては，回想法という手法であり，縦断的な調査ではないため，実際の中学生の「居場所環境」が直接的に自我同一性に影響を与えているとは必ずしもいえない。しかし，過去の「居場所環境」を良いと認知していることが，現在の自我同一性の安定に影響を与えているということ，つまり青年期で安定した自我同一性を獲得するためには，過去の「居場所環境」も重要な要因であるということは，非常に示唆に富んだ結果といえるのではないだろうか。

総合的考察

本研究は，大学生を対象に，現在の「居場所環境」と中学生の頃の「居場所環境」の認知の比較を通して，「居場所環境」の認知の変遷と，「居場所環境」と自我同一性との関連を明らかにすることを目的とした。

結果をまとめると，「居場所環境」は，まず有無においては，中学生の頃の方が「居場所がない」と認知する人が多いことが明らかとなった。過去を回想した時の傾向であるために，実際の中学生の「居場所」の有無とは異なっている可能性は上述したが，中学生を対象とした結果（杉本・庄司，2005）と，今回の大学生を対象とした結果のどちらも，中学生の方が「居場所」がない人が多いことが示されている。よって，中学生の方が「居場所がない」人が多いという傾向は，確認できたといえる。「居場所環境」で見ると，大学生になると「家族のいる居場所」が減り，「自分ひとりの居場所」が増えてくることが明らかとなった。

自我同一性との関連では，一番大きな関連が見受けられたのが「居場所なし」群であり，最も自我同一性が混乱していることが示された。また，中学生では

「家族のいる居場所」，大学生では「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」が自我同一性の安定には関連しており，杉村（1998）の指摘するように，自我同一性の形成には，「他者からの分離・自律」と「他者との結びつき」の両側面が必要であり，「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」がそれぞれの発達に応じた役割を担っている可能性が確認できたといえる。

以上の点から，まず「居場所」がないことが，自我同一性の安定には最も大きな関連を持っていること，さらには中学生の頃の「居場所」の有無の認知がより影響していることから，中学生の「居場所環境」の重要性が明らかとなったといえる。中学生において「居場所」がない人が多いということも明らかとなったことから，この問題に取り組むことは急務といえよう。また，「居場所」の有無のみばかりではなく，どのようなバランスの「居場所環境」をどの時期に持っているかということも，自我同一性には関連していることも明らかとなった。中学生では，親からの自立がはじまる年頃ではあるが，家族のいる場所に「居場所」を持てることが以後の自我同一性の形成には重要である。一方，大学生では，「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」が重要となってくる。つまり，自我同一性の形成に必要な「重要な他者」の存在が代わってくるとともに，「他者からの分離・自律」を確保するための「自分ひとりの居場所」も発達にしたがって重要となってくることが示唆された。したがって，自我同一性の形成には，発達段階によって必要な「居場所環境」があるということを指摘できたと考える。

本研究は，不登校をはじめとした現代の中学生の諸問題に対し，「居場所環境」という視点からのアプローチを探るための基礎研究として行った。今回の調査において，中学生の頃の「居場所環境」の認知が自我同一性という重要な精神的発達の一側面と関連していることが確認できた。このことは，「居場所」の問題が，その時期だけの問題に止まらず，生涯にわたって影響を及ぼす可能性を包含していることを示していると考えられる。したがって，中学生の「居場所」問題に介入していく意義はかなり高いといえるのではないだろうか。今回は，自我同一性との関連のみを明らかにしたが，今後，他の精神的発達の諸側面との関連も調査し，「居場所環境」の発達段階を示していく必要があると考える。その上で，その時期の様々な問題に対して，発達段階に応じて必要な「居場所環境」を充足し整えるという具体的なアプローチを提供していけるのではないかと考えている。

今後の課題としては，まず「居場所環境」の個人内の変遷をより正確に把握す

るために，縦断的な手法による調査をすることが挙げられる。それと共に，量的なデータばかりではなく，インタビュー等質的なデータの収集も行うことで，より「居場所環境」の発達的変遷を捉えることが可能となるのではないだろうか。ついで，本研究では，青年期の発達課題として自我同一性を取り上げたが，「居場所環境」と関連しているのは，それだけではないと考えられる。さらに他の心理的諸側面との関連も分析する必要があるだろう。最終的には，発達段階における「居場所環境」とその影響を包括的に明らかにすることで，「居場所」問題へのアプローチを提案していくことにつなげることが大きな課題といえるであろう。

引用文献

安齋智子　2003 「居場所」概念の変遷　発達，**24** (**96**)，33－37.

深谷昌志・永井聖二・山田剛　2001　居場所としての「学校」に関する考察―時系列の変化に視野をおきながら―　日本子ども社会学会第８回大会抄録集，53－54.

檜皮万里子・浅川潔司・古川雅文　2002　高校生の居場所と学校適応に関する研究　日本教育心理学会第44回総会発表論文集，83.

稲葉小由紀・西悟史・古川雅文・浅川潔司　2001　中学生の学校適応と居場所に関する研究　日本教育心理学会第43回総会発表論文集，455.

北山修　1993　自分と居場所　日本語の深層　岩崎学術出版　Pp. 127－181.

松田孝志　1997　現代高校生における居場所の内包的な構造　筑波大学教育研究科カウンセリング専攻修士論文抄録集，31－32.

宮下一博　1987　Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討　教育心理学研究，**35**，253－258.

文部省　1992　登校拒否（不登校）問題について―児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して（学校不適応対策調査研究協力者会議報告）　教育委員会会報，**44**，25－29.

永田彰子・岡本祐子　2005　重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の検討　教育心理学研究，**53**，331－343.

小畑豊美・伊藤義美　2003　中学生の心の居場所の研究―感情と行動及び意味からの考察―　情報文化研究，**17**，155－167.

大久保智生・青柳肇　2000　心理的居場所に関する研究(2)―居場所感尺度作成の試み―　日本教育心理学会第42回総会発表論文集，161.

小沢一仁　2000　自己理解・アイデンティティ・居場所　東京工芸大学工学部紀要，**23** (**2**)，94－106.

坂本昇一　1993　登校拒否のサインと心の居場所　小学館

Rasmussen, J. E. 1964 The relationship of ego identity to psychological effectiveness. *Psychological Reports,* **15**, 815-825.

杉本希映・庄司一子　2003　「居場所」の心理的構造とその発達的変化　日本子ども社会学会第10回大会抄録集，**85**.

杉本希映・庄司一子　2005　中学生の「居場所環境」とメンタルヘルスとの関連の検討　日本カウンセリング学会第38回大会発表論文集，295.

杉村和美　1998　青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し　発達心理学研究，**9**，45－55.

住田正樹　2003a　子どもたちの「居場所」と対人的世界　住田正樹・南博文(編)　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版　Pp. 3 －17.

住田正樹　2003b　子どもたちの「居場所」と対人関係　住田正樹・南博文(編)　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版　Pp. 101－168.

砂田良一　1979　自己像との関連からみた自我同一性　教育心理学研究，**27**，215－220.

田中麻貴・田嶌誠一　2004　中学校における居場所に関する研究　九州大学心理学研究，**5**，219－228.

谷冬彦　2001　青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成―　教育心理学研究，**49**，265－273.

富永幹人・北山修　2003　青年期と「居場所」　住田正樹・南博文(編)　子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版　Pp. 381－400.

豊田英昭・宮崎世津子・大寺せい子・小澤暁・芳賀明子　2000　小学校高学年児童の「学校における居場所」の研究Ⅲ―自分の教室の居心地と学校適応感―　日本教育心理学会第42回総会発表論文集，461.

堤雅雄　2002　「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱　島根大学教育学部紀要（人文・社会科学），**36**，1－7.

上野ひろ美　1992　「居場所」（身体）と「関わり」（対話）―共同感情の組み換え―　現代教育科学，**10**，28－30.

Appendix　多次元自我同一性尺度（谷，2001）

自己斉一性・連続性　　(*)は逆転項目

過去において自分をなくしてしまったように感じる。(*)
過去に自分自身を置き去りにしてきたような気がする。(*)
いつのまにか自分が自分でなくなってしまった気がする。(*)
今のままでは次第に自分を失っていってしまいそうな気がする。(*)
「自分がない」と感じることがある。(*)

対自的同一性

自分が望んでいることがはっきりしている。
自分がどうなりたいのかはっきりしている。
自分のするべきことがはっきりしている。
自分が何をしたいのかよくわからないと感じるときがある。(*)
自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある。(*)

対他的同一性

自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う。(*)
自分は周囲の人々によく理解されていると感じる。
人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる。(*)
本当の自分は人に理解されないだろう。(*)
人前での自分は、本当の自分でないような気がする。(*)

心理社会的同一性

現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う。
現実の社会の中で、自分らしい生活が送れる自信がある。
現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。
自分らしく生きてゆくことは、現実社会の中では難しいだろう。(*)
自分の本当の能力を生かせる場所が社会にはないような気がする。(*)